

# 芸術（音楽）

## 1 研究テーマ

### (1) 研究テーマ

「指導と評価の一体化」の実現に向けた学習評価の充実

### (2) 研究のねらい

歌唱(合唱)の題材を通した音楽Ⅰの目標実現に向けた手立ての有効性と課題を、検証を通して見いだすことをねらいとした。

## 2 実践事例

### (1) 題材の指導と評価の計画

ア 科目名：「音楽Ⅰ」

イ 題材名：各パートの音楽的な役割と言葉の発音を意識して合唱しよう

ウ 題材の目標：

(ア) 曲想と音楽の構造や歌詞との関わりについて理解し、創意工夫を生かした歌唱表現をするために必要な他者との調和を意識して歌う技能を身に付ける。

(イ) テクスチャ、構成を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて表現意図をもつ。

(ウ) 歌唱表現における他者との調和について関心をもち、主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽を愛好する心情を養う。

〔共通事項〕(1)

(本題材の学習において、生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：「テクスチャ」「構成」)

題材曲：混声四部合唱「ほらね、」伊東 恵司 作詞／松下 耕 作曲

エ 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
曲想と音楽の構造や歌詞との関わりについて理解している。 <b>【知識・歌唱イ(ア)】</b> 創意工夫を生かした歌唱表現をするために必要な、他者との調和を意識して歌う技能を身に付け歌唱で表している。 <b>【技能・歌唱ウ(イ)】</b>	テクスチャ、構成を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて表現意図をもっている。	歌唱表現における他者との調和について関心をもち、主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

オ 題材の指導と評価の計画 ○「記録に残す評価」 ●「指導に生かす評価」

次	時	◆ねらい ○学習内容 ・学習活動	知 技	思	態	評価方法、指導上・評価のポイント等
0		○「ほらね、」の各パートの音を確認する。 ・全員で一パートずつ音取りを行う。 ・10分間の常時活動として、①～③を行う。 ①全員で一パートずつ歌う。 ②二パートに分かれて歌う。 ③全パートに分かれて歌う。  ※本題材では、前題材から楽曲の音取りや各パートと合わせて歌うことを計画的に行い、それを「0次」				※楽曲の音取りと併せて、楽譜に記された音楽記号を意識して歌うことや楽曲に合った発声で歌うこと等を指導する。

		として設定した。			
<b>題材を貫く問い「調和のとれた合唱とは何か」</b>					
1	1・2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「調和のとれた合唱とは何か」について、現時点での自分の考えをワークシート(図1-1)に記述し、全体で共有する。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>◆楽曲の構造から、調和のとれた合唱に必要な要素を見いだして歌う。</li> </ul> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パート練習の中で音程の確認と共に、息を合わせるための休符やブレスの位置を確認する。</li> <li>・楽譜上で重要な休符やブレスの位置に印をつける。</li> <li>○自分のパートの役割を把握する。(A~Bまで)</li> <li>・自分のパートにマーカーを引いて声部ごとの動きを確認する。</li> <li>・二声部ごとのパート練習をして、自分のパートの歌い出すタイミングが他のパートとどのように関わっているか確認する。</li> <li>・A~Bまでを全体で録音する。</li> <li>・練習を通して必要と感じた表現方法について今日の結論をワークシート(図1-1)に記述する。</li> </ul>			<p>※ここでは、主にパート内でどのように調和のとれた合唱とするかについて歌い試しながら学習する。</p> <p>● 態 〈ワークシート(図1-1)〉</p>
	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>○合唱における言葉の表現について理解を深める。</li> <li>・前回の録音を聴き、本時の目標を確認する。</li> <li>・発音による違い、休符やブレスの位置によって得られる表現上の効果の違いについて理解するため、全体練習の中で歌詞の朗読と歌唱を繰り返して試す。</li> <li>○音楽の構造から他の声部との関わりについて知る。</li> <li>・二声部ごとのパート練習から、動きが揃うところと異なるところでの変化を捉える。</li> <li>・難しい箇所を把握して、主張すべき箇所を捉えて歌う。</li> </ul>	知 ●		知 〈観察〉
	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各パートの役割を意識して歌う。</li> <li>・歌い方のヒントとして楽曲の作曲された背景情報を知る。</li> <li>・楽譜上に印をつけ、他の声部と揃う箇所や自己の声部が主張すべき箇所を焦点化する。</li> <li>・全員で歌い、他声部と揃う箇所や主張すべき箇所を焦点化して歌った結果、どのような変化が生まれたのかを考え、ワークシート(図1-2)に記述する。</li> </ul> <p><b>【中間発表】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他声部と揃う箇所や主張すべき箇所を意識して歌う。(各パートの歌唱を動画で記録する)</li> <li>○曲想と音楽の構造や歌詞との関わりについて理解する。</li> <li>・他のパートの歌唱を聴き、感じたことや気付いたことをワークシート(図1-3)に記述する。</li> <li>・教師によるフィードバックから、自己評価をワークシート(図1-3)に記述する。</li> </ul>			● 態 〈観察〉
				知	

		<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの学習を振り返り、曲想と音楽の構造や歌詞との関わりについてわかったことをまとめる。</li> </ul>	○		<input checked="" type="checkbox"/> 知 〈観察、ワークシート(図1-3)〉
2	5	<p>◆他の声部との関わりを意識して、表現意図をもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ユニゾンと、声部ごとに異なる動きをする場面とどのような工夫が必要かを考える。</li> <li>・中間評価の動画を見て、他の声部との関わりを意識するために必要なこと、パートとしての課題点について個人で考えワークシート(図1-4)に記述する。</li> <li>・中間評価を経て考えた自分のパートの歌い方を、全体練習の中で確認する。</li> </ul>		●	<input checked="" type="checkbox"/> 思 〈ワークシート(図1-4)〉  <input checked="" type="checkbox"/> 態 〈観察〉 ※伴奏付きでの歌唱やアカペラでの歌唱で歌い試しながら確認する。
	6 本時	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「更に調和のとれた合唱をするために必要なこと」について考える。</li> <li>・各パートで、練習番号ごとの「他のパートとの関わりを意識して歌うために解決すべき課題」を書き出し、全体で歌い試す。</li> <li>・練習後に今回の練習を踏まえ、新たに工夫が必要であると感じたことや改めて必要だと考えることを、練習番号ごとにワークシート(図1-4)に記述する。</li> <li>・全体での演奏を録音する。</li> </ul>	技 ●	○	<input checked="" type="checkbox"/> 技 〈観察〉 ※他者との調和を意識して歌う技能に向けた成果と課題について各パートに伝える。 <input checked="" type="checkbox"/> 思 〈観察、ワークシート(図1-4)〉
3	7 ・ 8	<p>◆パートの役割を意識し、他者との調和を意識して合唱する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の録音を聴き、発表に向けた目標を決める。</li> <li>・全体発表のためのリハーサルをする。</li> <li>・各パート一人ずつの四人グループで他者との調和を意識して歌う。</li> <li>・「クラスでの発表」として全員で歌う。</li> </ul> <p>・本題材の学習を通して「調和のとれた合唱とは何か」について、自分なりの考えをワークシート(図1-5)に記述する。</p>	技 ○		<input checked="" type="checkbox"/> 技 〈リハーサルと全体で歌う活動〉 ※本題材では、全体発表のためのリハーサルと全員で歌う活動を繰り返し行う中で【技能】を評価する。  <input checked="" type="checkbox"/> 態 〈観察、ワークシート(図1-5)〉

合唱プリント No.1 自分のパートの中で大切な要素や構造をとらえて歌おう

年 組 番 名 前 ( )

【題材の流れ】

①調和に必要な音楽的要素や構造をとらえる → ②他のパートとの関わりを意識して歌う → ③自分のパートの役割をいかして歌う

【この時間の目標】自分のパートの中で大切な音楽的要素を見つけて歌う。

自分のパートに○→ ( ソプラノ・アルト・テノール・バス )

【活動の流れ・内容】

1) 「いい合唱」「調和のとれた合唱」ってどんな合唱のことだろう? / 必要なもの: 楽譜  
 自分の考える「いい合唱・調和のとれた合唱」をするために大切なことを楽譜中の情報をヒントに考えてみよう (ヒント: 音符、休符、歌詞や発音、強弱、構成、和音など)

自分の考える大切なこと・要素	他の人の考える大切なこと・要素
----------------	-----------------

2) 自分のパートに線を引こう。～楽譜上でどこをたどるか～ / 必要なもの: 楽譜、マーカー

3) プレスの位置や休符の位置 (タイミング) をとらえよう。 / 必要なもの: 楽譜、ペン

(  )

全体符 2分休符 4分休符 8分休符

4) 本日のまとめ: 今日の練習を通して、改めて「いい合唱・調和のとれた合唱」をするために大切なことは何だと思うか、今日の結論をまとめよう。

「いい合唱・調和のとれた合唱」のために必要な要素・歌い方・ポイントとなる楽譜中の情報

図 1-1 ワークシート 1

《楽譜③》

ほらね ぼくらはひとりじゃないー  
 A 「きつとねーだれもひとりじゃないー」  
 B 「きつとね、だれもひとりじゃないー」

発音のスピード感、息の勢いは鋭い  
 ほうが良いか、緩いほうが良いか?

《楽譜④》

きつとね だれもひとりじゃないー それでも  
 「ゆっくりそとと」を A “熱いラーメンを冷ますように速い息で、はきはきと発音する”  
 B “冷えた手を温めるように柔らかい息で、ていねいに発音する”

《楽譜⑤》

ゆっ くりそとと たそうたおう おもいでつまつ たあうたを

4) まとめ: 他のパートとの関わりを意識するためのポイントを押さえよう  
 《用語と演奏上のポイント: 練習後に記述しよう!》

ユニゾン	歌詞の (①) のタイミングがそろう。 歌った結果どう変化したか? →
主旋律とハーモニー	その瞬間このパートが主旋律 (メロディ) になるか、よく (②) ながら歌う。 歌った結果どう変化したか? →
掛け合い	パートごとの歌詞の発音のタイミングが (③) 箇所。※歌い出しを主張する。 歌った結果どう変化したか? →
言葉の発音	発音のタイミングをそろえたり、(④) や母音の響きを整えたりする。 歌った結果どう変化したか? →

図 1-2 ワークシート 2

合唱プリント No.3 他のパートの動きや魅力を知ろう

1年 組 番 名 前

【題材の流れ】

①調和に必要な音楽的要素や構造をとらえる → ②他のパートとの関わりを意識して歌う → ③自分のパートの役割を生かして歌う

【この時間の目標】自分のパートと他のパートの表現上のポイントをとらえる

【活動の流れ・内容】

1) 自分のパートを歌うとき、ポイントとなる部分はどこにあるだろう?  
 ポイントとなる部分 (歌詞や小節、A、Bなどの場面で示して記述しよう。)  
 (例) 「川は～の歌い出しの部分」

そこをどのように歌うと良いだろう??  
 (例) 「一文字目の子音を準備してはっきりと発音をそろえる。」

2) 他のパートのパートレッスンを聞いて気づいた「良さ、魅力となる部分」をメモしよう。

パート名:	よさ、魅力ポイント
パート名:	よさ、魅力ポイント
パート名:	よさ、魅力ポイント

3) ここまでの学習でわかったこの曲の構造と他パートとの関わりを、キーワードを参考にまとめよう。知識  
 キーワード【ユニゾン・主旋律・ハーモニー・掛け合い・休符・言葉の発音】

A	(例) ユニゾンからハーモニーに変化しているから●●パートとの音の重なりを意識する。
B	
C	
D	
E	

図 1-3 ワークシート 3

合唱プリント No.4 他の声部との関わりを意識して表現意図を持って歌うために

1年 組 番 名 前

【題材の流れ】

①調和に必要な音楽的要素や構造をとらえる → ②他のパートとの関わりを意識して歌う → ③自分のパートの役割をいかして歌う

【この時間の目標】他のパートとの関わりを意識して表現しよう

【活動の流れ・内容】

1) パートレッスンを振り返ろう (個人内)  
 動画を見て、「他のパートとの関わりを意識するために解決すべきポイント」について気づいたことをメモしよう。

よかった点	解決すべきポイント
-------	-----------

2) 調和のとれた合唱をするために必要な要素、ポイントはなんだろう (グループワーク)  
 自分たちのパートの担当箇所 ( A ・ B ・ C ・ DE ) の場面  
 パートであがった「解決すべきポイント」を挙げよう。

それぞれのパートからあがった意見を楽譜に書き込もう。 / 必要なもの: 楽譜・ペン

全体として調和のとれた合唱とするために、あなたはどのように表現を工夫しますか。  
 (ヒント: ①発音 (休符、プレス、ユニゾン、掛け合い) ②発声や声量 (主旋律とハーモニー) ③強弱④その他) 思考・判断・表現

A	
B	
C	
D	
E	

図 1-4 ワークシート 4

【最後に】  
「調和のとれた合唱」ってどんな合唱のことだろう？  
自分の考える「調和のとれた合唱」をするために大切なことをこれまで学習した言葉をヒントに考えてみよう。（ヒント：音符、休符、歌詞や発音、強弱、構成、和音など）

①自分の考える大切なこと・要素

②「他者との調和」を意識するために、あなたが合唱の練習を通して気づいたこと・学んだこと  
例）同じパートの人の声をよく聴くこと。（具体的に書いてみよう）

図 1-5 ワークシート 5

図 1 ワークシートは、総合教育センターウェブページにてダウンロードできます。

#### カ 授業実践（6時間目／8時間）

時間	○学習内容 ・学習活動	・指導上の留意点	□評価規準 (評価方法)
導入	<p>○前時を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前回までの学習を基に、自身の課題や調和のとれた合唱について考えたことを確認する。</li> <li>・ 前時の通し練習の録音を聞き、現状を把握する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自身のパートの課題と、他のパートとの関わりについて注目するよう言葉がけをする。</li> </ul>	
展開	<p>○各パートに分かれて <b>A</b>～<b>E</b> のそれぞれの箇所について、楽曲の構造の特徴や演奏の課題がどこにあるかについて考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ パート内で、現時点での「他のパートとの関わりを意識して歌うために解決すべき課題」を共有する。</li> <li>・ 各練習番号で、これまでの授業で学んだ「調和のとれた合唱をするために必要なこと」のうち、 <ul style="list-style-type: none"> <li>①発音(休符、ブレス、ユニゾン、掛け合い)</li> <li>②発声や声量(主旋律とハーモニー)</li> <li>③強弱</li> <li>④その他</li> </ul> </li> </ul> <p>のヒントを中心にどのように表現を工夫するべきかについてパートで考え、ワークシート(図1-4)に記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各パートでまとめた「他のパートとの関わりを意</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ①～④について、それぞれどのようなものを改めて説明する。(必要に応じて生徒に発表させる。)</li> <li>・ 発表で出てきたポ</li> </ul>	

	<p>識して歌うために解決すべき課題」を発表する。</p> <p>○グループでまとめた解決するための課題を意識して歌う練習をする(図2)。</p>  <p style="text-align: center;"><b>図2 歌唱の様子</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・パートごとにまとまって整列し、全体で歌う。</li> <li>・全体練習の中で二声部ずつ(高声と低声、内声と外声)練習や伴奏のある練習と伴奏の無い練習をする。</li> <li>・ユニゾンの場面で休符やブレスなどのタイミングをそろえることでの変化、強弱を意識したうえでの変化、掛け合いの場面での強弱や発音の主張をした時の変化を体験する。</li> <li>・本時のまとめとして全体で一番を通して歌い、録音をする。</li> </ul>	<p>イントを、電子黒板上の楽譜に記述しながら共有する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他者との調和を意識して歌う技能に向けた成果と課題について各パートに伝える。</li> </ul>	<p><b>技</b>〈観察〉</p> <p>※指導に生かす評価</p>
まとめ	<p>○歌い方の工夫が音楽で表現されていることを実感する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・録音した合唱を聴き、それぞれの箇所を意識すべきポイントが、音楽として表現されていたかを確認する。</li> <li>・今回の練習を踏まえて歌った成果、新たに工夫が必要であると感じたことや、改めて重要だと考えることについて、練習番号ごとにワークシート(図1-4)に記述する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽として表れていた部分を口頭で生徒へフィードバックする。</li> </ul>	<p><b>思</b>〈観察・ワークシート(図1-4)〉</p>

研究実施校：神奈川県立大師高等学校(全日制)  
 実施日：令和7年12月3日(水)  
 授業担当者：坂田 修一 教諭

## (2)「指導と評価の一体化」の実現に向けたポイント

本研究では、「指導と評価の一体化」の実現に向けた学習評価の充実として、歌唱(合唱)の題材とした音楽Ⅰの目標実現に向けた手立ての有効性と課題を、検証を通して明らかにすることを目的とした。今回の題材構想のきっかけとなったのは、歌唱(合唱)を題材とする際の計画の難しさと評価に関する課題が散見されたことである。推進委員会では、それらの要因として「題材を成立させるための技能の設定」「合唱の題材における『指導と評価の一体化』の実現に向けた指導計画」「合唱における技能の評価とその方法」の三つにあるのではないかと考えた。それらの課題解決に向けて検討し、作成した題材の指導計画、ワークシートを基に研究授業を行い、観察、ワークシートの記述から検証を行った。

## ア 題材を成立させるための技能の設定について

多くの生徒は中学校等で実施されている合唱コンクールの経験から、合唱に対して意欲的に取り組むことができている。推進委員会では、「歌唱」において、『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説芸術(音楽 美術 工芸 書道)編』(以下、『解説』という)に示される思考力、判断力、表現力等及び技能を身に付けさせるために、まず「生徒がその楽曲をある程度、音程が取れる状態で歌えること」を題材に取り組む上での前提条件とした。しかし、この前提条件に達するために多くの時間が割かれてしまい、本来題材で学んでほしいことや、身に付けさせたい力の習得まで到達することが難しいという課題が指摘された。そこで、本題材での題材を成立させるための技能を「楽曲の音取り」と「全体で楽曲を歌えるようになること」と設定し、これを本題材より前から計画的に取り組むこととした。

本題材では生徒がある程度音程が取れた状態で楽曲を歌えるようにするため、前題材における導入時の発声練習の際、本題材の楽曲の音取りを併せて行った。また、生徒が他パートの違いや特徴を捉えられるよう、すべてのパートを全員で歌う活動を実施した。

上記の活動を実施した後、本題材の導入時にワークシート1(図1-1)にて「『調和のとれた合唱』を行うために大切だと考えること」について現段階での考えを記述させた(表1)。「自身の考え」についての生徒の記述(表1)より、題材での学びが「楽曲を歌えるようになること」から始まるのではなく、合唱という形態の特徴から必要なことを捉えるようとしていることが分かる。このことから、題材を成立させるために必要な技能の習得を本題材より前の段階から計画的に進める取組は有効であったと言える。

題材を成立させるための技能の習得を本題材より前から計画的に取り組むこととした手立ては有効であったと言える。

一方で、「他者の考え」についての生徒の記述(表1)より、「音程を正しく取る」「楽譜に記された記号を確認する」といった意見は、歌唱を行う上で前提となる基礎的な技能に向けた記述である。基礎的な技能の習得を前題材にて行うことにより、本題材スタート時に前提条件に到達していることをねらいとしたが、【知識】として設定した「曲想」と「音楽の構造」に関する学習に至るまでに時間を要する結果となった。これは、本研究での題材を成立させるための技能の設定に課題があったと考えられる。題材を成立させるための技能は、単に楽曲の音取りということだけでなく、強弱を意識して歌うことや楽曲に適した発声で歌うこと等、丁寧に指導する必要があったと言える。このような指導を行うことで、生徒全員が題材で設定した【知識】や【技能】の習得に向けた学習によりスムーズに移行することが可能であったと考えられる。

表1 ワークシート1(図1-1)の生徒の記述(一部抜粋、原文の趣旨を変えない範囲で改編)

題材の導入時で「調和のとれた合唱」を行うために大切だと考えること	
自身の考え	他者の考え
<ul style="list-style-type: none"> <li>それぞれのパートの声質が揃っている</li> <li>強弱をつけるために発音を意識する</li> <li>全員がブレスのタイミングを合わせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>音程を正しく取る</li> <li>歌詞に合った歌い方をする</li> <li>楽譜に記された記号をよく確認する</li> </ul>

## イ 合唱の題材における「指導と評価の一体化」の実現に向けた指導計画

合唱は学校行事で行われることが多いため、題材として計画した学習の目標が「行事で発表すること」となる傾向がある。推進委員会では、合唱を題材として計画する際、『解説』の内容を基にどのように指導と評価の一体化を実現すればよいかのイメージを持ちづらいつという課題が挙げられた。指導と評価の一体化の実現に向けて、『解説』の内容を基に題材をそれぞれの観点に当てはめて整理し、評価規準を明確にすることが重要である。それにより、生徒に身に付けさせたい力を明確に提示でき、それが学習内容の共通認識に直結する。そこで本研究では、歌唱(合唱)の題材を通して生徒に身に付けさせたい力とそれらに関連する指導事項、そのために必要な学習内容を検討した。

推進委員会では、歌唱(合唱)の題材を通して生徒に身に付けさせたい力を「音楽的な役割や意味を理解し、集団の中で折り合いをつけたり方向性を合わせたりしながら協働する力」と設定した。そのうえで、本題材で身に付けさせたい力と学習の方向性の明確化し、評価の視点を一致させることを目

的として「調和のとれた合唱とは何か」という題材を貫く問いを設定した。この問いを軸とした学習により、学習の目的や評価の視点が生徒にとって明確になり、自ら歌唱の課題を見いだすことができると考えた。

実際の授業では、「調和のとれた合唱とは」という問いに対して、クラス全員での共通認識を図った。ワークシートの記述(表1)から「強弱を意識して歌う、各パートが発音、タイミングやリズムに注目して歌うことで一体感が生まれ、調和のとれた合唱となること」を共通認識できたことが確認された。さらに、「ユニゾン」「主旋律とハーモニー」「掛け合い」「言葉の発音(子音や母音の処理の仕方)」について、二声部ずつの練習の中で、各パートがどのように関わっているかを学んだ。練習では、外声、内声、低声、高声など、組合せを変えることで、旋律が揃う部分、歌詞のタイミングが揃う部分や異なる部分について理解を深めることができた。全体練習の場面では、伴奏を入れた練習と伴奏を除いた練習を繰り返し行うことで、本題材における「調和のとれた合唱」に必要な要素である「強弱」「歌詞の発音」「入りのタイミング」と、各パートの関わりについての理解がより明確になった。

表2は、中間評価として、「他声部と揃う箇所や主張すべき箇所を意識して歌う活動」と「他のパートの歌唱を聴き、感じたことや気付いたこと」に関する記述である。これにより、楽曲の特徴や構造を通じて各パートの役割について捉え始めていることが分かる。また、自身のパートをどのように歌うかについて表現意図も持ち始めていることが明らかになった。この活動を通じて、楽曲を試行錯誤しながら歌う過程で感じ取った特徴を生かす方法を考えるようになり、曲想と音楽の構造との関わりについての理解が深まっていくと考えられる。さらに、表現意図が明確になっていくことが推測される。

表2 ワークシート3(図1-3)の生徒の記述(一部抜粋、原文の趣旨を変えない範囲で改編)

自身のパートを歌う時のポイントとなる部分を問う記述	
「ゆっくりそっと歌を歌おう」の歌詞の部分は主旋律だから声質を意識して、少しためるくらいで歌いたい。でも、柔らかくゆったり歌い過ぎると、リズムが崩れる。	
他パートの良さや魅力、特徴となる部分を問う記述	
アルト	「日差しは」～「友達だから」の音高が特徴。このパートはハーモニーを作るためにとっても大事。もう少し出てきてほしい。
テノール	テノールにしかない音の跳躍が大事。
バス	「ひとりじゃない」からのCまでが大事。Eの終わり方も独特。

表3は各パートの関わりを通じて調和のとれた合唱とするために解決すべき課題や、どのように表現を工夫するかについての記述したものである。学習したことを生かし、クラスで定めた目標地点へ向けての具体的な取組が考えられていることが分かる。

このことから、題材を通して生徒に身に付けさせたい力とそれらに関連する指導事項が機能していることが確認できる。また、問いを軸にした学習から、学習の目的や評価の視点が明確になり、音楽的な視点に基づいて自ら演奏の課題を見いだすことができるようになったと考えられる。

表3 ワークシート4(図1-4)の生徒の記述(一部抜粋、原文の趣旨を変えない範囲で改編)

調和のとれた合唱とするために、どのように表現を工夫するかについての記述	
練習番号A	休符を意識して歌う。他パートに声量で負けないように歌う。
練習番号B	「ほらね」の掛け合いを、他パートを聞きながらバランスをとる。
練習番号C	「ゆっくり」の部分は自パートだけのところがあるから、声量を出す。
練習番号D、E	休符を意識して歌う。音を最後まで伸ばす。

一方、他生徒のワークシートには、「音程を正しく取る」や「パート内でタイミングを揃える」等の記述も多く見られた。これらは歌唱する上で前提となる基礎的な技能に向けた記述に留まっていると考えられる。本題材の【知識】として設定した「曲想」と「音楽の構造」との関わりについて理解を深めるためには、楽曲の特徴を分析的な視点で捉え、歌い試しながら学習することで実感を伴った理解につなげる必要があると考えられる。また、自己のイメージと関連づけて歌唱表現に対して表現意図をもつためには、共通事項アで設定した「音楽を形づくっている要素」を思考・判断のよりどころとし、生徒が感じ取った曲想とパート同士の音の重なりや楽曲に表れる変化から楽曲の特徴を捉えることが必要であった。

#### ウ 合唱における技能の評価とその方法

多くの生徒は、中学校等で実施されている合唱コンクールの経験を通じて、「全員で創る合唱」の良さを経験し、その成功体験を基に合唱の題材への取組に対して意欲を持っている。また、全員で創る合唱では、集団の中で折り合いをつけたり方向性を合わせたりしながら協働することが可能である。本題材での合唱は「全員で歌い創ること」として計画した。推進委員会では、題材で設定した【技能】の評価について、集団の中で個々を評価することが難しいという課題が挙げられた。そこで、評価方法については、次の(ア)、(イ)の方法で検証を行った。

##### (ア) 個々の歌声を録音する

録音環境等の課題はあったものの、ワークシートの記述と録音から全体の歌唱の中で生徒がどのように歌唱しているのかを確認することができた。しかし、確認できた内容は旋律の歌い方や強弱など、楽曲を歌唱する上での技術に留まり、本題材で設定した「他者との調和を意識して歌う技能」に結びつくものといえるかについて課題が挙げられた。

##### (イ) 小グループに分けての歌唱する

生徒からは「少人数の方が、自分の声と特定の他者の声との響きを感じやすかった」「人数が多いと周りに引っ張られる、もしくは自分が引っ張らなくてはならない等、自分の意思よりも周りの影響を受けやすく感じた」という声が挙げられた。これらの意見は全員で創り上げる合唱の難しさを示していると同時に、改善すべき課題でもあることを示唆している。この難しさに対して試行錯誤を重ねることを通じて、本題材で設定した力を身に付けさせることが可能であると考えられる。一方で、このことから、本題材において小グループでの歌唱を通して【技能】を見取することは難しいと判断した。

(ア)、(イ)の評価方法はどちらも授業者が【技能】について「記録に残す評価」を行うための手段という側面が大きく、「全員で創る合唱の良さ」から離れてしまう可能性があると考えた。推進委員会では、本題材における【技能】の評価方法として、個々の歌声を聴いて評価する手法では適切性に欠けると判断した。そこで、「評価においても他者との調和を意識して歌うことが軸となる」という視点から、全体で歌った際にまとまりのある合唱であると授業者が判断することができる場合、個々を「概ね満足できる状況と判断されるもの(B)」と評価することができると考えた。

本題材では、全体で歌う中で個々を評価できるかを検証するため、発表のためのリハーサルや、クラスでの発表として全員で歌う活動を通じた【技能】の評価と、各パート一人ずつの四人グループで歌唱する活動における【技能】の評価を比較した。グループでの歌唱で「概ね満足できる状況と判断されるもの(B)」とした生徒は全体で歌唱しても同評価と判断できることが確認された。また、「十分に満足できる状況と判断されるもの(A)」とした生徒についても同様にグループ及び全体での歌唱の両方で同評価と判断できることが確認された。

このことから、全体で歌った際にまとまりのある合唱であると授業者が判断することができる場合、個々の技能を評価することが可能であると考えられる。まとまりのある合唱になればなるほど個々の歌声は薄くなる。これは「生徒が調和を意識して歌う技能が身についた結果」とであると判断できる。なお、「まとまりのある合唱」とは具体的にどのような状態かについては、生徒の実態に応じて、授業者が明確に設定する必要がある。また、授業者がその定義を明確にし、生徒との共通認識を持ちながら学習を進めることで、適切な判断が可能になると考える。

#### (3) まとめ

本研究を通して、生徒が“調和のとれた合唱とは何か”を自分ごととして考え、パートの役割を理解することによって、他パートとの関わり、さらには全体の中での表現へと学びを深めていくことができた。歌唱の授業において陥りがちな「気持ちを込める」等の抽象的な言葉に留まらず、音楽的な

視点に基づいた思考へ移行した点が成果として挙げられる。最終的に、生徒が目指す姿を明確にイメージしながら、主体的に学ぶ姿が見られた。これは『指導と評価の一体化』の実現に向けた取組が、生徒に身に付けさせたい力を明確にすることにつながり、学習内容を明確化することにつながった結果である。

一方で、合唱における題材計画にはいくつかの課題も明確となった。本題材における課題は、生徒の表現意図とその根拠が明確化されていない点が挙げられる。これは、題材を通して合唱を成立させるための学習に偏ってしまったことが原因であると考えられる。〔共通事項〕と関連した楽曲固有の特徴やその魅力に迫る学習を充実させ、そこから生まれる表現意図を試行錯誤しながら、協働的に取り組める計画が必要であった。本研究の内容を再検討するとともに、次年度の研究ではこれらの課題に対処するための手立てを講じ、データを収集・分析し、それらの手立てが有効であったかを明らかにしていきたい。